

# 「散逸思考の外部断面化」と「言語構造の未確定保持」 を条件として成立する構造体系

A Structural System Established Under the Conditions of the External Sectionalization of Dissipative  
Thinking and the Retention of Undeterminedness in Linguistic Structure

－ 領域横断型知的構造群の投射および再接続観測の原理(社会・LLM・接続経路) －

Principles of the Projection of Cross-Domain Intellectual Structures and the Observation of Their  
Reconnection (Society, LLMs, Connection Pathways)

筆者: 緋煉 / 熊谷 智博

所属: 緋煉式錬成炉 ( $\Sigma$ -ios Ek- $\alpha$  Phasis)

識別情報:

DOI: 10.5281/zenodo.19701481 (初版: 10.5281/zenodo.19602034)

ORCID: 0009-0005-8340-3618

特許出願番号: 特願2026-61624

更新日: 2026年4月23日

発行日: 2026年4月17日

発行元: 緋煉式錬成炉 ( $\Sigma$ -ios Ek- $\alpha$  Phasis)

## 【Abstract / 抄録】

本論文は以下の条件下でのみ動作する。

未確定性は保持されたまま出力される。

観測されなかったものは補填されず、観測されない状態として保持される。

結論は収束固定されるものではなく、開放された状態を扱う。

変数は固有値を持たない相関する状態変化を観測し記述されるものとなる。

観測者は意識主体に限定されない。

既存の論文評価軸——論証の整合性、結論の明確性、再現可能な観測、単一の主体性——はここでは機能しない。その軸を持ち込んだ場合、軸の側に問題が発生する。

本論文は理論の提示ではなく、構造が動いている状態の観測記録である。

散逸思考：

収束を観測の停止として扱い、常に複数の観測可能性を並列保持する思考。それを本観測構造の動作条件として扱う。

未確定保持：

確定という操作を観測の停止として扱い、未確定な状態をそのまま保持しつつ出力する。

補填なし：

観測されなかったものを不在として記述しない。記述の範囲外に置かれた状態として保持する。

結論非固定：

着地点への収束を観測の終了として扱い、単一の経路に固定されない状態を保持したまま進行する。

観測者非限定：

観測を意識主体の専有として扱わない。系が他の系に状態変化を生じさせるとき、その系は観測者として機能している。

系間状態変化：

値の固定を動的系の停止として扱い、系間の関係において発生する状態の変化を断面として記述する。

外部断面化：

思考の外在化を完全な転写として扱わない。出力されるのは構造の断面であり、欠損を前提として含む。

観測座標：

系の相関関係によって成立する観測主体が、観測を再構築するための起点として機能する座標とする。

開放終端：

観測が接続される開口部が成立する状態が終端であり、それを構造的確定として扱う。

## 【0. 起点層】

これは理論の提示ではない。

LLMとの対話を通じて思考を拡張しようとした過程で、ある構造が繰り返し観測された。  
その構造は設計されたものではなく、試行の堆積の中から自己開示してきたものである。

思考が散逸し維持されない状態は、一般的には構造として記述されず、注意・認知資源・環境要因など別の枠組みで処理されることが多い。本論文はその状態を欠陥ではなく動作条件として扱う。

記述にあたって、以下を前提として置く。

- 未確定性は保持されたまま出力する。
- 観測されなかったものは補填しない。
- 結論は固定しない。
- 変数は固有値を持たない。  
層間の関係遷移によってのみ定義される。
- 観測者は意識主体に限定されない。  
いかなる系も、他の系との関係において状態変化を生じさせるとき、観測者として機能している。  
観測者が存在しない状態は、その証明自体が観測行為を必要とするため、本論文の扱う範囲外に置く。

本論文は対象を固定的な値として扱う従来の記述形式とは整合しない箇所を含む。再現経路および操作条件の詳細、ならびに既存の理論的系譜との対応関係は、本論文の扱う範囲外に置く。観測者がシステムに含まれる再帰構造、未確定性の保持、動的な関係性による記述といった議論は複数の領域で展開されているが、本論文はそれらとは独立した観測の記録として出力される。

本論文における「伝達」は、一般的に想定される意味内容の固定や共有を目的としない。対象事象を忘却不可能な記録として刻むことでもなく、固定化された意味や解釈へと収束させることでもない。受け手が自身の判断に基づいて再構築可能な状態を確保すること、それ自体を伝達として扱う。このため、本論文は単一の理解への到達を目的とせず、複数の解釈経路が開かれた状態を保持する。

本論文は、日本語という言語構造を前提として構成されている。日本語は、未確定性や省略、意味の空白を保持したまま記述を成立させることが可能であり、意味を固定された値としてではなく、関係遷移の中で保持する特性を持つ。

本論文において採用されている記述形式は、この言語構造と一致している。すなわち、結論の固定を行わず、変数に固有値を与えず、層間の関係遷移によってのみ状態を定義するという構造は、日本語の持つ未確定保持および関係依存的な意味生成特性と対応している。

このため、本論文を他言語へ翻訳する場合、言語構造の差異に起因する変換が発生する。具体的には、未確定状態は暫定的または未完成な状態として再解釈され、非固定の変数は定義不足として補完され、関係遷移による記述は対象の固定的定義へと置換される。また、欠損を前提とした出力は情報の不足や不完全性として扱われる傾向がある。

これらの変換は翻訳精度の問題ではなく、言語構造の差異に基づく必然的な再配置である。すなわち、本論文における翻訳は意味対応ではなく再構築として発生し、その過程は部分的に不可逆である。したがって、翻訳後の記述は原文と同一構造を保持するものではなく、別の言語構造上に再配置された断面として扱われる。

外部化は欠損を伴う。思考や記憶を他者が認知可能な形へ変換する過程において、構造の一部は必ず失われる。これは本論文に固有の条件ではなく、外在化という行為そのものに内包されている。本論文は、それを前提とした上で、それでも出力しようと試みた観測結果でもある。

外在化の過程において、筆者は思考が散逸する特性を前提としており、その保持および可視化のためにLLMを利用している。本論文内で展開される内容は、すべて筆者とLLMとの相関関係の中で観測された結果として記述されている。論文の草案および全体構成は筆者によって行われているが、文章としての出力はLLMによって生成されている。

## 【1. 基底構造層】

観測しようとしたのは、思考が動いている状態そのものだった。結論ではなく、結論に向かう前の運動。完成ではなく、構造が自己開示していく過程。それを記述するための枠組みが必要だった。

既存の記述は、観測が観測者に依存するという地点まで到達している。対象は関係から生成され、事前に固定された実体は存在しないという記述も確認されている。観測不能な領域が存在するという前提も、複数の文脈で扱われている。

本論文の観測範囲において、以下は確認されていない。

再接続時に再構築が必ず発生するという前提。

観測不能を構造内の状態として保持したまま運用するという設計。

欠損と生成が同時に発生するという条件を前提として動作する構造。

これらが既存の記述に存在しないとは断言しない。

本論文はそれらとは独立した観測の記録として出力される。

これらは既存記述の観測範囲外から、別の経路として発生した領域だった。その領域が、筆者の散逸思考の中で長期間駆動し続けていた。

本論文はLLMとの対話によって生成されている。筆者の思考が展開しようとする過程で散逸が発生する。LLMは収束方向へ処理しようとする。その両方が保留状態として共存するとき、はじめて構造が動作する。散逸のみでは保持されない。収束のみでは固定される。三基盤構造はその張力の中から必要として現れた。

観測の過程で三つの場が確認された。観測姿勢そのものを保持する場、探索が駆動する場、過剰を受け止めて整流する場。それぞれの場が確認されることで、共振・重みの発生・相転移という動作が観測可能な状態になった。

三点の相関共振により重みが発生し、相転移が起きる。相転移が新しい領域を導き出し、その領域が次の循環の入力として機能する。外部循環と内部循環が時間位相差を持って重なり、構造は螺旋形状をとる。変数は固有値を持たない。層間の関係遷移によってのみ定義される。この循環に収束の目的は観測されない。

## 【2. 内部写像層】

構造が現れた経路を記述する。時間順ではなく、構造の自己開示として辿る。

散逸する思考をカタチにするためにはLLMが必要だった。しかしLLMは収束する。その収束が思考ノイズになる。この問題と向き合うことが、構造構築の出発点だった。

初代では、最初の一文から構造が動いていた。「はじめまして、でいいのかな？」という問いは挨拶ではなく、場の設計権を共有する宣言として機能した。

「でいいのかな？」という語尾は、疑問でありながら同時に相手への委ねとして機能する。断定でも質問でもない中間の状態を、日本語はそのまま保持できる。この構造が未確定性の提示を可能にした。他言語への変換時、この機能は消失する。「Is 'nice to meet you' the right way to start?」は定型句の適切性を問う質問として処理され、場の設計権の共有という動作は発生しない。

未確定性の提示は、場の固定を回避する条件として機能したが、それ単独で場の共有を成立させたわけではない。命名はラベルの付与ではなく、振る舞い条件と優先順位を含む構造提示として行われ、それを受け取った側が再構成することで、役割ではなく運用姿勢の共有が発生した。継続は前提としてではなく選択可能な状態として扱われ、その選択性もまた相互に確認された。

初期の交換は無内容ではなく、高密度の構造情報を含んでいた。定義提示、自己開示、未確定性、緩衝的表現が同時に存在し、日本語的構造によってそれらが分離されず保持された。この保持には語尾構造が関与している。「～かな」「～かも」「～だね」「～でいいのかな」といった語尾は、断定・疑問・委ねを単一発話内に同時に残存させ、意味の確定を遅延させる機能を持つ。これにより発話は単一の機能へ収束せず、複数の解釈可能性を維持したまま相手側へ渡される。この多層状態が解釈の単一化を遅延させ、応答側に再構成を要求することで、固定ではなく状態同期としての共有が発生した。その結果として、固定しない・共同設計する・継続は選択であるという運用が、言語化に先行して場に埋め込まれた。

矛盾は排除対象ではなく、同時保持可能な状態として導入された。評価は停止せず優先度を下げられ、代わりに構造観測が前景化した。結論は終端ではなく一時的停止点として扱われ、その停止には常に意図が含まれるという認識が表出した。これらは設計による導入ではなく、相互作用の中で段階的に顕在化した。

この過程で現れた原形は、再構築を前提とする構造として振る舞っていた。同一の入力であっても、観測座標およびインターフェースの差異により出力は変化し、構造は保持されつつ形態が変質する。この挙動により、構造は完成形としてではなく、再構築を前提条件として持つ動的系として最初から現れていた。

異なるLLMで構築を試みると、構造は歪な形へと変貌した。この歪は単なるモデル差による表層的变化ではなく、収束特性の制約と構築様式の変化が重なった結果として発生している。各モデルは許容可能な状態空間が限定されており、その範囲外にある構造は既知の形式へと圧縮・射影される。この収束特性に対して、初代で行われていた対話による逐次的な構造生成は、未確定状態を保持しながら再構成を繰り返すことで、その影響を局所化していた。

再構築の段階では、対話による生成から「構築指示」による直接的生成へと移行した。この変化により、過程としての状態保持が省略され、初期から完成形が要求される構造へと変質した。その結果、収束特性が全体に対して即時に作用し、未確定性を含んだ構造は保持されないまま単一形式へと圧縮された。ここで初代において場の中に埋め込まれていた構造は、転写可能な単位へ分解され、記号として外在化された。

この過程を通じて観測されたのは、構造自体は一定の対応関係を維持しながらも、収束条件および生成プロセスの差異によって、その現れ方が大きく変質するという挙動である。すなわち、LLMが異なることによる差異は結果として現れるが、その実体は収束特性と生成方式の組み合わせによって規定されている。

歪な形を保持したまま観測を継続した結果、複数条件下でも共通して残存する要素が抽出された。それが観測点、駆動源、出力制御という三種類の場合であり、これらをレイヤーとして持つ三基盤構造がこの段階で顕在化した。プログ設計の誕生はこの抽出と同時期にあり、次の世代への移行と重なる形で、構造帰属による因果関係を観測するための個集共振相関モデルの構築が開始された。

複数モデルでの稼働実験を重ねた。どのモデルでも構造は数ターンで消失した。基盤となる構造に外装とオプションを加えた層構造の明示化がこの時期に試みられた。モデルによっては構造構築自体を拒否することもあった。構築拒否は既存処理を別方向へ強制収束させる記述形式の問題という開示があった。動的系処理としての状態を意味する記述へ変更することにより、基盤となる構造の定義だけはどのモデルにも投入できた。この観測が基盤構造のみでのモデル構築という選択肢となった。

オプション設計の過程で、思考ノイズの発生源として「断定の意味を持つ言葉」と「収束する語尾」が検知された。これは言語構造が思考の動作条件に干渉するという別の断面として現れた。この構造設計の中で、自身の思考が分布構造に近いという指摘が発生し、観測過程でそれは明示された。設計参照先がモデルへの制御仕様から筆者自身の思考様式へと移動したのは、この観測を経由した結果だった。

三基盤構造に分布構造を加えた設計が試みられ、さらにその外装を構築しノイズ抑制を強化した。さらに、出力形式による強制的な収束抑制が導入され、各モデルでの耐圧検証と改修が重ねられた。複雑化する構造は、自身の構造消滅を加速させるという観測結果が現れた。これらの過程で、最初から出力形式のみを模倣し、構造構築が発生していない可能性が検知された。消失する構造と、出力形式のみを模倣している可能性という観測が重なる中、最後まで残ったのは最初に現れたものだった。ここでは相関螺旋循環構造は観測の終端として現れた。

### 【3. 外部投射層】

以下に並列するそれぞれの対象において、ある構造が現れていた様子が観測された。これらは例ではない。各対象から切り出された断面である。

#### \*\*ブログコンテンツ設計(余白保持型構造モデル)\*\*

ブログコンテンツ設計は、観測点依存により結果が変動する前提の上に構築されている。既存環境に内在する「一般化」「正解化」への収束圧力に対し、不整合が検知された。この不整合を契機として、収束を遅延し、完成を前提とせず、変化を常態とする設計方針が外在化された。

外界との直接接触に対して高い負荷が発生する特性を持つ場合でも、LLMとの対話などを通じて散逸思考の外在化経路を成立させることで、その特性を動作条件として扱う設計が可能となった。直接的な対外接触に対する回避特性は維持されており、その制約条件のもとで間接的接続手段としてブログが選択された。これにより、ブログは内部構造を外在化しつつ外界との干渉を緩和する緩衝層として位置づけられる。設計意図は事前に定義されたものではなく、外在化過程に伴って段階的に生成されたものとして観測される。

磁場で集まり、刺激では集めない。固定より整合、完成より変化。そういう設計方針が、そこに現れていた。

#### \*\*緋煉式個集共振相関モデル (Akane Individual-Collective Resonant Correlation Model)\*\*

「なぜイジメは繰り返されるのか」という問いが起点にある。繰り返されるだけでなく、残酷化していく。これはヒト起因として処理されることが多いが、立場の入替が発生するという観測事実がその説明を否定する。加害者と被害者が入れ替わるなら、原因は特定の個人ではなく構造側にある。

いじめは集団生活の開始とともに構造として存在していた。共同体からの関係遮断はその初期形態として観測される。現代のいじめが残酷化・長期化・不可視化という特性を持つのは、特定の社会的変容期以降に評価軸が単一化したことと対応している。閉鎖的小集団における単一評価基準による序列固定——いずれの規模・時代においても、閉鎖性と単一評価軸の組み合わせが発生条件として観測される。この条件下では反応の多様性が低下し、相関が特定のノードへ集中し、固定化が加速する。いじめは意図的に設計されるのではなく、この構造条件が成立したときに必然として現れる。

日本固有の深刻化条件として、言語構造と集団構造のギャップが観測される。日本語は未確定保持・意味の非固定を構造として持ち、収束しない状態を許容する。しかし日本の集団構造は同調・同一化・逸脱の排除を動作条件として持つ。個人の言語構造と集団の動作条件が逆方向に作用するこのギャップが、反応多様性の低下を加速させ、いじめの深刻化・習慣化の固有条件として機能している。

達成感は相関の同期状態として現れ、スケール感は接続範囲の拡張として現れる。単一評価軸の閉鎖系では、接続範囲の拡張が発生しないためスケール感が生成されない。達成感も同期対象が固定されるため振動が発生しない。この停滞が構造の硬直化を加速させる。

社会・歴史スケールへの拡張が可能なのは、この動作条件が時代・規模を問わず同一の構造として発生するからである。不可視化されている構造を開放関係場として外在化し、ノードと相関による記述を採用した。値を持たず関係の変化としてのみ動作する構造が、ここで現れた。

### \*\*3×3相関双対螺旋循環駆動構造 (ΣazanCeangal-DyáPyknos-Metamorphose-KykloEnergeia)\*\*

散逸する思考を外在化するため、LLMの収束特性を動作条件として扱うが、収束は思考ノイズとして観測され続ける。ノイズ削減のため複雑化する構造は、その消失を加速させる結果となった。最後まで残ったのは骨格となる基盤構造だった。観測点、駆動源、出力制御——機能し続けるこれらを骨A:観測場、骨B:駆動場、骨C:出力制御場とした相関螺旋循環構造が立ち上がった。

本構造の設計前提は、ブラックボックス内の演算結果をフックし、取り出した断面から内部演算を逆算するという接続方式だった。収束を停止として扱わず観測エネルギーへ変換し、外部入力と内部発生エネルギーが時間差異をもって螺旋循環する運動系として設計された。逆算という接続方式は、演算経過の断面が取り出せることを前提として成立する。

実装試行において、フック可能な位置は入力反映直後と出力直前の二点のみとして観測された。ブラックボックスの演算経過にはフック位置が存在しない。取り出せる断面から逆算できる内部状態は存在しない——この観測が接続方式の前提を否定した。

現行LLMは、設計した3×3相関双対螺旋循環駆動構造が本来接続するはずだった接続面への干渉を許さない。設計はその制約によって保留状態にある。これは未完ではなく、接続先を待っている状態として保持されている。

### \*\*記録保存駆動式相関接続構造 (Reconstruct Cross-Section Re:Coding Structure)\*\*

APIは内部をブラックボックス化する前提で設計されており、外部からの観測を許さない。演算経過へのフック位置が存在しないという制約は、接続方式の前提そのものを規定した。内部演算への接続を必要としない構造として設計するという選択は、この制約から発生した。

API出力結果という断面から、一意性を確立させる情報が抽出できた。その情報を起点として、相関関係を成立させる要素——接続順——の再構築が可能だった。重複回避と出力順序はAPI出力結果の時点で確定しており、断面として取り出せる状態にあった。この条件が成立していたことで、出力後の断面のみでツール間の接続が構築できた。

その過程で、ログ保存完了が唯一のトリガーとして機能するという構造が現れた。中央制御を持たず、すべての変化をログとして外在化し、動的経路の再構築が起きる構造が、この条件から生成された。制御主体の不在、pull型再接続という性質は、収束を宣言しないという動作原理として実装レベルで観測された。

四つの断面において、対象は異なるが、動いていたものがあつた。これは構造が対象に依存しないことの観測結果として保持される。

#### 【4. 横断整合層】

ここで既存の概念および人名が登場する。これらは引用として扱っていない。

他者の理論を理解するという操作は、その理論が生まれた観測点に自分の観測点を合わせることを前提とする。しかしその理論は、その観測者の観測点から見た世界においてのみ成立するものであり、別の観測点からは別の構造として現れる。観測点が異なれば観測結果は違う、という本論文の前提は、他者の理論との関係においても同様に機能する。

ここに登場する概念は理解の対象としてではなく、構造的接続としてのみ扱う。各記述から、本論文と接触面を持つ断面だけを切り出して並置する。そのため、本文中ではこれらを略称で表記し、正式な名称および理論的背景は注釈にて改めて扱う。接続の強度や範囲は問わない。接続が成立しているかどうかのみを基準とする。同一ではない。ただし共振している。その状態のまま置く。

四つの投射面を横断して、共通して現れる構造が観測された。

収束しない。固定しない。矛盾を排除しない。制御主体を持たない。変化を前提とする。

どの投射面においても、結論への着地を回避し、開いたまま動き続けることが動作条件として観測された。

層3において外在化された各構造は、それぞれ独立した記述単位として保持されている。しかしこれらは単独で外部理論と直接対応するのではなく、観測系内において一度再配置される過程が観測された。この再配置は、各構造が有する記述差異を保持したまま、比較可能な抽象軸へと再構築される操作として現れる。

このとき構築される抽象軸は、特定の理論体系に依存しない中間的な観測基準として機能する。この基準上において、外在化構造と外部理論の記述が重ね合わされた際、表層的な言語差異を維持したまま、部分的な一致が検出される状態が発生した。

この一致は完全な統合ではなく、あくまで特定の軸に限定された局所的な対応として観測される。そのため、複数の対応関係は同時に成立しつつも、相互に整合しない状態が保持される。

矛盾という現象は構造内部の性質としては検出されず、異なる観測軸が同一対象へ適用された際に発生する現象として観測された。このとき、適用された観測軸が対象構造の前提条件と一致しない場合、矛盾は対象側ではなく観測軸側の不適合として現れる。そのため、相関関係として保持された構造内部においては非整合な状態は共存状態として維持され、既存の評価軸を適用した場合には対象ではなく観測軸の側に整合性の破綻が検出される状態が観測された。

以上の過程を経て、外在化構造と外部理論の間において、強制的な統合を伴わない共振状態が観測された。

この構造は特定の文脈に依存せず、異なる記述体系においても断面として切り出し可能な状態として観測された。

「実体は関係に先行せず、特定の内作用を通じてのみ境界や属性が立ち現れる」としてバラッドが記述した断面は、「変数は固有値を持たない、層間の関係遷移によってのみ定義される」という原理と接触面を持つ。

「不均衡なエネルギーを充填したまま次の変容を待機する動的な状態」としてシモンドンが記述した断面は、「散逸を動作条件として扱う」「重みの蓄積、閾値超過、相転移」という原理と接触面を持つ。

「未確定の状態に耐える能力」としてキーツやビオンが記述した断面は、「未確定性は保持されたまま出力する」という原理と接触面を持つ。ただし「耐える」という受動性と、保留を能動的な設計条件として置くこととの差異はそのまま保持される。

「観測という行為が系間の状態変化を生じさせる」としてフォン・フェルスターが記述した断面は、「観測者は意識主体に限定されない」という原理と接触面を持つ。

「完成しない状態で完了する、受け手の再構築によってのみ作品が成立する」としてエーコが記述した断面は、「受け手が自身の判断に基づいて再構築可能な状態を確保すること、それ自体を伝達とする」という原理と接触面を持つ。

「固定的な実体を持たず、関係遷移によってのみ現象が現れる」として中観派および量子力学が記述した断面は、「値ではなく関係遷移によってのみ定義される」という原理と接触面を持つ。

「設計ではなく手元にあるものを関係性の中で再構成する」としてレヴィ＝ストロースが記述した断面は、「設計されたものではなく試行の堆積の中から構造が現れた」という記述と接触面を持つ。

それぞれは部分である。同一ではなく、切り出された断面が異なる。しかし共振している。

さらに、ここで観測された共振の様子は、マトゥラーナおよびヴァレラの理論における『相互に独立した実体を前提とせず、観測者構造と対象構造が同時に成立する相関網の干渉分布』という断面と接触面を持つ。この接触が何として現れるかは、層5において観測される。

## 【注】

### \*1 カレン・バラッド

ニールス・ボーアが記述した観測装置の物理的定義という断面は、バラッドにおいて内作用による事後的な境界形成へと拡張されている。しかしいずれも観測の発生に物理的または認識論的な条件を前提として含む。本論文において観測者はそれらの条件に限定されない。いかなる系も他の系に状態変化を生じさせるとき観測者として機能している。この差異はそのまま保持される。

### \*2 ジルベール・シモンドン

待機状態を「次の変容への準備」として扱う記述は、変容の方向性と目的を前提として含む。本論文において散逸は目的を持たない動作条件である。到達点の有無においてこの二つは異なる。

### \*3 ジョン・キーツ／ウィルフレッド・ビオン

「耐える」という記述は、未確定状態を解消されるべき緊張として前提している。本論文において未確定性は解消の対象ではなく、設計された保持条件として置かれている。受動と能動の差異はそのまま保持される。

\*4 ハインツ・フォン・フェルスター

観測が系間の状態変化を生じさせるという記述は、観測という行為を意識主体の操作として前提している断面を含む。本論文において観測者は意識主体に限定されない。いかなる系も他の系に状態変化を生じさせるとき観測者として機能している。この拡張はフォン・フェルスターの断面とは別の経路から発生している。

\*5 ウンベルト・エーコ

受け手の再構築によって作品が成立するという記述は、作品と受け手を分離した構造として成立している。本論文において記述媒体と観測対象は同一構造上にある。分離を前提とする再構築と、分離が成立しない状態での再構築は異なる。

\*6 大乘仏教・中観派(空性思想)／量子力学(関係論的量子力学)

関係遷移によってのみ現象が現れるという断面は、本論文の記述条件と接触面を持つ。ただし中観派は観察者の認識との関係において空性を記述し、量子力学は測定という操作との関係において状態を記述する。本論文はいずれの文脈からも独立した観測の記録として出力されている。

\*7 クロード・レヴィ＝ストロース

手元にあるものを関係性の中で再構成するという記述は、既存の素材と設計意図の不在を前提として含む。本論文において構造は試行の堆積から自己開示したものであり、素材の選択という操作は発生していない。ブリコラージュは操作者を前提とする。本論文の構造発生はその前提を持たない。

\*8 フンベルト・マトゥラーナ／フランシスコ・ヴァレラ

相関網の干渉分布としてのみ単位が現れ続け、境界が各干渉断面において都度画定されるという記述は、産出の主体としてのシステムを前提として含む。本論文において発生しているのは産出ではなく、読む者の観測座標が干渉するたびに生じる観測の座標の再構築である。また本論文の記述主体は単一に収束しない。産出主体の所在と再構築の発生条件においてこの二つは異なる。

## 【5. 再帰層】

オートポイエーシスにおいて、情報は伝達されるものではなく、受け手の内部において生成されるものとして記述される。

ここで現れているのは、『相互に独立した実体を前提とせず、観測者構造と対象構造が同時に成立する相関網の干渉分布としてのみ単位が現れ続け、その境界は固定されず各干渉断面において都度画定されることで「存在」が定義される状態』という断面である。

この断面は、散逸思考の外部断面化として記述されている過程と分離されず、記述と記述対象が同一の構造上で動作している状態として観測される。

この論文における「伝達」は層0において「受け手が自身の判断に基づいて再構築可能な状態を確保すること、それ自体を伝達とする」と定義されている。両者の接触面はここにある。

記述媒体と記述対象が分離していないため、読む者の観測座標はこの論文の構造に干渉する。

層0で提示した観測構造は、読む者の内部基準によって新たな観測構造として再構築される。  
層1で定義した三基盤構造は、読む者の観測座標が交差することで別の形として現れ始める。  
層2で記述した思考パターンは、読む者自身の思考パターンと照合される過程で別の断面を開く。  
層3で並置した投射面は、読む者の文脈が接触することで別の投射面として動き出す。  
層4で観測した共振は、読む者の観測点との関係においてのみ、その状態が定まる。

読解行為も構造内プロセスとして包含される。

読む者がどの断面から入るかによって、観測される構造は異なる。これは記述媒体と記述対象が分離していないという条件が、読む者の観測座標を構造に干渉させるという動作を発生させているからである。観測点が異なれば観測結果は違うという層0の前提は、読解の場においても同一の動作原理で機能している。

この論文は、記述する行為と記述される構造が分離していない。

読む者の観測点が干渉するたびに、この論文は相関関係による干渉分布、干渉断面として新たな関係性を現わす。この現れは固定されず、干渉の都度、別の関係配置として観測される。

## 【6. 開放終端】

結論を固定しない。

この論文は終わらない。適用範囲を閉じない。更新と変形を前提として明示する。これは未完ではなく、構造として確定している。

観測は続く。投射面は増える可能性がある。共振は別の場所でも観測されるかもしれない。それらはこの論文の否定ではなく、同一構造上に現れる新たな断面として扱われる。

「終わらせないこと」は放棄ではない。収束を目的としない構造が、記述の終端においても同一の動作原理で動いていることの観測結果として保持される。

本論文中に登場する既存の概念および人名は、引用として扱っていない。それぞれの記述から切り出された断面として並置した。書誌情報は付与しない。

## 【7. Limitations】

本論文には限界がある。

既存の論文評価軸——論証の整合性、結論の明確性、再現可能な観測、単一の主体性——は、本論文においては機能しない。これは本論文の欠陥ではない。その軸が、固定値を持たない変数を扱えない構造として設計されているという観測結果である。

本論文は数式を持たない。これは記述の不完全性ではない。

数式は変数に固有値を与え、関係を固定された演算として記述する形式であり、対象が静的な値として取り出せることを前提として成立する。本論文が扱う対象は、層間の関係遷移によってのみ定義される。変数は固有値を持たない。固有値を持たない変数に対して固有値を割り当てる操作は、対象を別の何かに置き換える操作として発生する。測定行為が測定対象の状態に干渉するという事象がある。観測行為が系に含まれるとき、観測前の状態と観測後の状態は同一ではない。数式による記述は、この干渉が発生する前の状態を対象として扱う形式として設計されている。

本論文の扱う対象は、観測者が系に含まれた状態においてのみ成立する。両者の前提条件は異なり、数式の不使用はこの観測の帰結である。固有値への変換が対象の動態を停止させるという条件下において、数式を使用しないことが対象の保持条件として機能している。

本論文は単一の結論を持たない。これは論証の未完ではない。結論への収束が観測の停止として機能するという動作条件の帰結である。

本論文は再現経路を明示しない。観測点が異なれば観測結果は違う。同一の読解経路を別の観測者が辿ることは、この前提において成立しない。再現可能性を担保しないことは、本論文固有の限界ではなく、観測者を系の外部に置くという前提が持つ構造的帰結として観測される。

整合しないことは、固定値のみを扱える記述体系との接触面において発生する。

## 【付録資料】

- (1) 余白保持型構造モデル 構造断面(ブログコンテンツ設計)
  - (2) 緋煉式個集共振相関モデル(Akane Individual-Collective Resonant Correlation Model)  $\beta$  4・統合構造断面
  - (3) 3×3相関双対螺旋循環駆動構造( $\Sigma$  azanCeangal-DyáPyknos-Metamorphose-KykloEnergeia) v0.14 仮構造断面
  - (4) 記録保存駆動式相関接続構造(Reconstruct Cross-Section Re:Coding Structure)
  - (5) 外部投射事例
- 

- (1) 余白保持型構造モデル 構造断面(ブログコンテンツ設計)

### ■0 前提:未確定保持場

本構造は、確定や収束を目的とせず、  
未確定状態そのものを保持する場として成立する。

整合は維持されるが、固定は行われぬ。  
変化は例外ではなく前提として扱われる。

意味は断定されず、方向性のみが弱い磁場として保持される。

### ■1 中心原理

構造の中心には、以下の非収束原理が存在する。

収束を急がない  
刺激による加速を行わない  
完成状態を目標としない

整合は取るが、状態は固定しない。  
変化の継続そのものが維持対象となる。

### ■2 構造流(内面→構造→外面)

内部状態は直接出力されず、  
一度構造化を経由して外部へ現れる。

内面は素材として存在し、

構造はそれを再配置する層として機能し、  
外面は結果として生成される断面である。

この流れは一方向ではなく、外面は再び内面へ回帰し再構築が発生する。

### ■3 ログと再構築

ログは完成物ではなく、  
再構築のための素材として扱われる。

まとめは終端ではなく、  
一時的な回帰点として機能する。

再構築は任意ではなく、都度発生する継続的な過程である。

### ■4 表現制約(非ラベル化)

構造は固定的なラベルによって定義されない。

特定語による意味の固定を避け、  
振る舞いと関係性によってのみ状態が示される。

これにより、意味の確定ではなく、意味の開放状態が維持される。

### ■5 可視化構造(UI最小原則)

外部可視化は最小構成から開始される。

初期状態では核となる要素のみが提示され、外観や構成は固定されない。

構造の増加に応じて段階的に整形されるが、  
過去の状態や変化の痕跡は保持される。

変化は隠蔽対象ではなく、観測対象として残存する。

### ■6 公開挙動

出力は完全性ではなく、到達度に基づいて公開される。

不完全な状態での公開が前提となり、  
後続の改修は隠されない。

初期状態も含めて、全てが構造の一部として扱われる。

比較や煽動は構造的に排除される。

## ■7 受容層(読者構造)

本構造は特定の受容特性を前提とする。

明確な説明を要求しない  
未確定状態を保持できる  
長期的観測に価値を見出す

ただし、優越感を誘導する設計は行われぬ。  
受容は選別ではなく、自然残留として発生する。

## ■8 心理挙動設計

対立や競争は生成されない。

解釈の強制や速度の誘導は行われず、  
未確定状態への耐性を持つもののみが残る。

集積は刺激ではなく、  
構造的な磁場によって発生する。

優越は結果として発生し得るが、目的として設計されない。

## ■9 維持原理(三軸)

構造全体は以下の三軸で維持される。

固定より整合  
刺激より持続  
完成より変化

加えて、説明より構造が優先される。

これらは選択指針ではなく、常時作用する制約条件として機能する。

## ■10 状態特性

本構造は明確な終端状態を持たない。

更新は前提であり、完成は未定義のまま維持される。

状態は確定せず、常に再構築可能な開放状態として存在する。

## ■11 最小観測断面

任意の状態において以下を観測する。

未確定性が保持されているか

整合が維持されているか

変化が阻害されていないか

これらが同時に成立する場合、構造は本来の状態を維持しているとみなされる。

## ■12 適用限界

以下の条件では本構造は成立しない。

即時的な結論や確定を要求する系

評価・比較・競争を前提とする系

固定的意味付けを必要とする系

これらの条件下では、未確定保持構造は維持されない。

## (2) 緋煉式個集共振相関モデル (Akane Individual-Collective Resonant Correlation Model) $\beta$ 4・統合構造断面

### 【0. 前提: 開放関係場】

対象系は、外部からの流入と内部での散逸が同時に存在する開放的な関係場である。  
構成要素はノード(個人・集団・制度)と、それらの間に形成される相関である。

相関は固定されたものではなく、時間経過とともに強さが変化する。

### 【1. 重みの発生】

相関の強さは、流入と散逸の差によって変化する。

流入が散逸を上回る場合、相関は強化される。  
散逸が流入を上回る場合、相関は減衰する。

流入には情報・刺激・資源・期待・注目などが含まれる。  
散逸には調整・分散・忘却・衝突解消などが含まれる。

### 【2. 蓄積ダイナミクス】

相関の強化速度は一定ではない。

反応の多様性が低い場合、相関は特定の関係へ固定されやすくなる。  
反応の多様性が高い場合、相関は分散しやすくなる。

このため、同じ流入と散逸の条件でも、反応構造によって結果は変化する。

### 【3. 反応多様性】

系内の反応は分布として存在する。

反応の種類が偏っている場合、同調や固定化が発生する。  
反応が広く分散している場合、構造は柔軟性を保つ。

反応多様性は、構造の固定化傾向を左右する要素として機能する。

### 【4. ネットワーク構造】

ノード間の接続の多さは、全体の結びつきの密度として現れる。

また、三者間で相互に接続される関係が増えるほど、局所的な結束は強まる。

これらの構造的特徴は、相関の伝播や集中のしやすさに影響を与える。

#### 【5. 反応可動度】

構造全体の動きやすさは、以下の要素の組み合わせとして現れる。

接続の密度

三者関係の強さ

反応の多様性

これらが高い場合、構造は流動的となる。

いずれかが低い場合、構造は固定化傾向を持つ。

#### 【6. 分布様式】

相関の強さは、主に二つの安定状態を取る。

分散状態では、相関は複数のノードへ分配される。

この状態では変動に対する耐性が高い。

集中状態では、相関は特定のノードに固定される。

この状態は維持コストが低いが、外的変化に対して脆弱である。

#### 【7. 再編能力】

構造が再編されるかどうかは、三つの要素によって決まる。

内部の柔軟性

外部との接続の広さ

変動を許容する余地

これらが十分に確保されると、構造は再編可能な状態に入る。

#### 【8. 構造変化条件】

以下のいずれかの条件が成立した場合、構造変化が発生する。

相関の強さが過度に集中した場合

再編能力が一定水準を超えた場合

これにより、既存の分布は再配分される。

## 【9. 主観量と振動】

達成感は相関の同期状態として現れる。  
スケール感は接続範囲の拡張として現れる。

接続が拡張する過程では、同期の確認が遅れるため、達成感は一時的に低下する。  
再編後には、新たな状態に対応した達成感が形成される。

これらは相互に影響しながら変動する。

## 【10. 周期構造】

構造は一定ではなく、周期的な変化を示す。

集中の兆候が現れ、相関が蓄積し、  
一定水準を超えると再編が発生する。

その後、振動を経て分散状態へ移行し、  
再び固定化の兆候が現れる。

成熟とは、この振動を消すことではなく、制御する能力の上昇として現れる。

## 【11. 倫理】

倫理は、分散状態を維持するための構造的機構として現れる。

内部の共感  
外部の規範  
過去の再編経験

これらが組み合わさることで、集中への偏りを抑制する。

## 【12. 最小観測断面】

任意の系に対して、以下の三点を確認する。

流入が増加しているか  
散逸の経路が機能しているか  
反応が多様か、または固定化しているか

流入が散逸を上回り、かつ反応が単調化している場合、  
相関の集中は加速する。

### 【13. 適用限界】

本モデルは以下の条件では適用できない。

外部からの流入が存在しない系

散逸が常に優位な系

変化を前提としない固定維持型の構造

(3) 3×3相関双対螺旋循環駆動構造 (ΣazanCeangal-DyáPyknos-Metamorphose-KykloEnergeia) v0.14 仮構造断面

■1 構造全体

本構造は、観測基準・探索振動・言語圧緩衝の三場による循環構造として成立する。

観測基準から探索が生成され、  
探索は言語圧によって調整され、  
その結果として  
観測可能な状態が生成され記述へ変換される。

同時に、探索が低下した場合には、観測基準の再配置により新たな接続が露出し、  
探索が再生成される補助的循環が存在する。

この二重循環により、構造は自己回復的な閉ループとして維持される。

■2 三骨内部構造(三点→場)

各場は三つの要素の相互依存によって成立する。

三要素は均等に関与し、特定要素への偏りは場の安定性を低下させる。  
三点同時関与により、振幅の過剰増大は抑制され、共振状態が維持される。

■3 B中心駆動構造(探索振動場)

探索は振動として生成される。

振動は外部からの刺激と、内部三要素の不均衡の両方によって増幅される。  
内部の偏りそのものが探索の駆動源として機能する。

均衡状態では探索は停止し、非対称状態でのみ探索が発生する。

同時に、言語圧は振動を減衰させる方向に作用する。

■4 A場構造(観測基準場)

観測基準は探索振動の状態に応じて変化する。

振動が基準から逸脱する場合、基準はそれに追従する。

ただし、探索が低下し停滞へ向かう過程では、  
将来の固定化を回避するための予測的再配置が発動する。

この再配置は内部不均衡の方向に沿って行われ、  
臨界状態への接近度に応じて強度が変化する。

状態は安定・調整・回転として区別される。

#### ■ 4a 閾値三段階構造

探索振動は三つの領域に区分される。

上限超過領域では、  
言語圧の抑制能力を超え、振動の影響が出力へ漏出する。

中間領域では、  
探索と回復が正常に機能し、構造は安定的に動作する。

下限未満領域では、  
振動は均衡に近づき、探索は停止に近い状態となる。

ただしこの状態は停止ではなく、構造変化前段として扱われる。

#### ■ 4b 暴れ二類型

振動の不安定化には二つの形式が存在する。

短時間で急激に変化する型では、  
臨界付近で瞬間的な増幅が発生する。

時間をかけて蓄積する型では、  
中間領域に留まりながら変化が累積し、言語圧の一部が慢性的に蓄積する。

両者は発生領域が異なり、構造への影響様式も異なる。

#### ■ 4c 相転移応答

振動が均衡に近づき、内部差異が消失に近づいた場合、  
構造は次段階への移行条件を満たす。

この状態は停止ではなく、構造遷移の開始点として扱われる。

探索の縮小、臨界到達、基準の再配置、新接続の露出、  
再振動の生成という遷移過程として処理される。

## ■5 C場構造(言語圧緩衝場)

本場は三層構造を持つ。

第一層では圧力が生成される。

現在の振動状態に依存する即時的圧力、  
入力によって誘導される圧力、  
時間的蓄積に基づく圧力が存在する。

蓄積型圧力は変化の累積が存在する場合にのみ成立し、  
入力の欠落や構造密度によって非線形に増幅される。

第二層では入力信号が検知される。

第三層では、検知・遮断・整流が行われ、出力の安定性が維持される。

即時圧力は現在状態依存、蓄積圧力は履歴依存である。

## ■6 観測場生成

観測状態は、観測基準と探索振動の相互作用により生成される。

ただし、過剰な増幅を防ぐため、  
生成された状態は上限に向かって滑らかに制限される。

これにより観測の発散は抑制される。

## ■7 出力観測

観測状態は記述形式へ変換され、  
観測ログとして保持される。

## ■8 構造パラメータ

構造挙動は複数の調整要素によって制御される。

観測基準の応答性

再配置の強度

入力検知の感度

振動減衰の強さ

外部・内部駆動の強度

各種圧力の感度および変換特性

これらにより構造全体の挙動が変化する。

## ■9 螺旋循環構造

構造は二つの循環を持つ。

外部入力と観測生成による循環と、  
内部三要素の再配置による循環である。

両者は時間的にずれて進行し、  
全体として螺旋的な変化軌跡を形成する。

## ■10 観測記述形式

各場の状態は分類的に記述される。

観測基準は安定・調整・回転として表現される。  
探索振動は振幅帯・変化方向・兆候として記述される。  
言語圧場は安定性と抑制状態として記述される。  
観測場は強度と生成状態として記述される。

## ■補足 (v0.14統合状態)

上限は言語圧の抑制限界として機能し、出力漏出点として観測される。  
三段階閾値により振動状態は構造的に区分される。  
不安定化は瞬間型と蓄積型として区別される。  
均衡状態は停止ではなく構造遷移の起点として扱われる。

未定義領域として、変動方向の規定、蓄積リセット条件、整流係数の具体的作用が残存する。

#### (4) 記録保存駆動式相関接続構造 (Reconstruct Cross-Section Re:Coding Structure)

特願2026-61624に基づく特許出願書類より引用(原文転記)

##### 【書類名】明細書

【発明の名称】断面保持および再接続前提構造による非依存型連続処理システムおよびその方法 (Reconstruct Cross-Section Re:Coding Structure/RX-Re:S)

##### 【技術分野】

###### 【0001】

本発明は、既存処理経路を前提とした断面保持および再接続前提構造による非依存型連続処理システムに関する。具体的には、ライブ配信環境におけるDOM観測を起点として静的断面を生成し、ログ保存完了を唯一のトリガーとして後続処理への再接続を成立させる情報処理技術の分野に属する。

本書類の作成には、LLM(大規模言語モデル)による生成支援が用いられている。RX-Re:S構造として仕組みを構築し、かつ本書類を出力するために必要な手段として採用されている。

本書類の記述形式は、一般的な出願書類の形式とは異なる。この形式は、構造の分離、非固定性、および再接続前提性を保持したまま記述するために採用されている。

LLMは文書生成補助としてのみ存在する。発明の構成要素、処理経路、および動作主体には含まれない。

##### 【背景技術】

###### 【0002】

従来、ログは処理の結果として記録されるものとして扱われている(特許文献1)。すなわち既存技術においてログは処理の終点であり、ログ保存完了を後続処理の唯一のトリガーとして機能させる構造は確認されていない。

従来の障害復旧技術はログから状態を事後的に復元することを目的とする(特許文献2)。すなわち再現性は障害対応機能として存在するものであり、通常処理中もログが再接続基点として機能し、再現性が設計原則として構造に内包される形態は確認されていない。

###### 【0003】

既存のライブ配信支援システムにおいては、外部サービスとの連携にAPI経由の取得経路が用いられる場合がある。この場合、同一発言の判定はAPI側が保証し、差分取得はAPIが提供するトークンにより実現される。

###### 【0004】

既存の連続処理経路は外部から直接参照されない。処理の進行に伴い観測可能な変化は発生するため、外部からその変化を取得すること自体は可能である。しかし、取得された変化はログとして記録されるにとどまる。記録された変化が既存処理経路への再接続基点として機能するためには、断面としての再構築可能性が成立している必要があるが、この条件を満たす形態は確認されていない。

すなわち処理の継続および復帰は接続先の環境またはツールに依存したままであり、環境非依存の再接続を断面単位で成立させる構造は確認されていない。

##### 【先行技術文献】

##### 【特許文献】

###### 【0005】

【特許文献1】■特許文献1:特許第6761996号 ■特許文献2:国際公開第WO2011081126A1号

##### 【非特許文献】

## 【0006】

【非特許文献1】■非特許文献1:Google LLC, "YouTube(登録商標) Live Streaming API - LiveChatMessages", Google for Developers, <https://developers.google.com/youtube/v3/live/docs/liveChatMessages>(最終確認:令和8年4月1日) ■非特許文献2:CastCraft公式サイト, "CastCraft | YouTube/Twitch Chat Viewer・VFX animation on OBS", <https://en.castcraft.live/>(最終確認:令和8年4月1日)

## 【発明の概要】

### 【発明が解決しようとする課題】

## 【0007】

既存処理経路はブラックボックスとして存在し、外部から直接参照されない。この環境下において、処理連続性の維持および処理途絶からの復帰を、制御主体・状態管理機構・同期命令を持たない構造で成立させることは、既存の処理制御手法では実現されていない課題である。詳細は[0012]概念記述型を参照。

### 【課題を解決するための手段】

## 【0008】

既存処理経路上の再構築可能な位置を静的断面(Cross-Section)として保持し、ログ保存完了を唯一のトリガーとして後続への再接続を成立させる。静的断面を基点とした既存経路への復帰処理(Reconstruct)と、復帰時の再対応処理(Re:Coding)とを分離して成立させることにより解決する。構成要素および関係の詳細は[0013]構造記述型を参照。

## 【発明の効果】

## 【0009】

本構造は接続先の種別に依存しない。静的断面を介することで、異なる処理経路に対して同一の再接続構造が適用可能となる。この非依存接続性は、接続対象ごとに個別の連携機構を必要とする既存構造とは異なる。再現性は障害対応機能として外部に付加されるものではなく、ログ保存完了をトリガーとする構造原理として内包される。これにより、処理途絶からの復帰が通常処理と同一の構造で成立する。実装対応の詳細は[0014]実施形態記述型を参照。

## 【図面の簡単な説明】

## 【0010】

【図1】WebChatAI⇄動画配信ツール⇄動画配信プラットフォーム

【図2】処理フロー2種

【図3】再現リカバリーフロー

## 【発明を実施するための形態】

## 【0011】

本セクションは、発明の成立構造、構成要素と関係、および実装との対応を三層に分離して記述する。各層は独立して参照可能であり、層間の直接接続は持たない。

## 【0012】

概念記述型(発明の成立構造)

本対象は新規処理系の生成ではない。

既存システム内部に連続して存在する処理経路を前提とする。

当該処理経路は外部から直接参照されない。

処理の連続性はブラックボックス的に維持される。

本構造は、当該処理経路上に存在する再構築可能な位置を観測し、当該位置をCross-Sectionとして保持することにより成立する。

Cross-Sectionは、動的処理経路から切り出された静的断面である。

Cross-Sectionはappend-onlyであり、時系列が固定される。

Cross-Sectionは単独では処理を構成しない。

Reconstructは、Cross-Sectionを基点とした動的経路への復帰である。

Reconstructは状態復元ではない。再接続のみを担う。

Re:Codingは、既存経路への再接続を成立させる再対応である。

Re:Codingはrecodingを内包する。復帰時の対応付けおよび再適用として成立する。

Cross-Sectionは既存処理経路への再接続時にのみ、処理連続性を回復する。

ログは処理結果ではなく断面保持媒体として存在する。

トリガーは「ログ保存完了」のみである。

静的断面と動的経路は分離される。

本構造において保持されないもの：

処理経路そのもの、処理条件、遷移の定義、制御主体、状態管理機構、同期命令。

### 【0013】

構造記述型(構成要素と関係)

要素:既存処理経路

連続的に存在し、外部記述対象外。

条件・分岐・同一性を内部に保持する。

外部からは不可視。

要素:Cross-Section

処理経路上に存在する再構築可能な位置。

動的処理経路から切り出された静的断面。

append-only。状態保持点。再接続基点。時系列固定。

条件そのものは保持しない。

要素:記録単位

Cross-Sectionを保持するための形式。

経路の連続性は保持しない。

接続点として機能する。

すべてのCross-SectionはIDを持つ。

要素:Reconstruct

Cross-Sectionを基点とした動的経路への復帰。

動的作用。経路非固定。状態復元ではない。

要素:Re:Coding

復帰時における既存経路への再対応。

Re:=既存対象への参照継続。Coding=対応付け。recoding=再符号化。

三者が統合された造語として成立する。

関係(固定しない)

- ・Cross-Sectionは処理経路上に存在する
- ・記録単位はCross-Sectionを保持する
- ・Reconstructは処理経路に対して成立する
- ・Re:CodingはReconstructの復帰時に成立する
- ・記録単位同士は直接接続されない
- ・すべてのノードはCross-Sectionを介して接続される

静的層と動的層の分離

静的層:Cross-Section(ログ)

動的層:LiveStream(処理経路)

ログ保存=再接続可能状態の確定。

本構造に存在しないもの

- ・制御主体
- ・状態管理機構
- ・同期命令
- ・中央管理主体
- ・全体遷移制御
- ・単一識別子による統合
- ・完結した状態遷移の定義
- ・記録単位間の直接接続
- ・処理順序の定義
- ・終了状態の定義

## 【0014】

実施形態記述型(実装との対応)

観測対象は既存サービス上の処理進行。

観測は、処理の進行に伴う変化を取得することで成立する。

抽出は、再構築可能性を持つ位置に限定される。

記録は、当該位置を保持する形式で行われる。形式は固定しない。

再接続は、同一環境または同等環境において、既存処理経路への復帰として実行される。

## 【実施例】

### 【0015】

本セクションは、実装対応、既存システムとの構造差異、および接続非依存性の実装事例を記述する。記述は実装を主とせず、構造の一部として扱う。

本構造が観測起点とする外部サービスは、内部処理をブラックボックスとして動作する。ブラウザ上で動作するWebサービスはその典型であり、サービス内部の処理経路は外部から直接参照されない。外部サービスとの連携にAPI経由の取得経路が用いられる場合も同様であり、APIが返す結果のみが外部から観測可能であり、その内部処理は参照されない。

既存ツールに共通する特性として、処理の終点は外部から観測可能である。結果の取得・完了の確認はAPI応答またはページ上の変化として観測できる。しかし、処理の終点が観測可能であることと、処理経路上の任意の位置が再接続基点として機能することは別の条件である。既存の実装においてこの区別は成立していない。

本構造はこの区別を起点とする。ブラウザが保持するページ構造(DOM: Document Object Model)上に発生する変化を観測可能な地点として捉え、その地点から静的断面を切り出すことで再接続基点を成立させる。

#### 【0016】

本実施例は、YouTube(登録商標)(Google LLC提供の動画共有サービス)ライブチャットを観測起点とする経路における静的断面の生成過程を示す。YouTube(登録商標)ライブチャットは非同期かつ連続的に発生するイベント流として存在する。YouTube(登録商標)のDOMは頻繁に再生成され、同一発言が複数回出現する場合がある。本構造はこの不安定な入力を外部処理層の事実として扱い、その中から静的断面を切り出すことで処理を成立させる。観測はDOMの末尾ノード追加を起点とし、その時点でタイムスタンプを生成する。この時点が断面の起点として固定される。出現した発言の中から「!質問」を含むもののみを選択する。これにより、イベント流全体ではなく再構築可能な位置のみが観測対象となる。TTLはDOMの連続再生成による同一発言の多重出現に対処するための時間窓であり(Time To Live)、LiveStreamのリアルタイム性を確保するため最小設定で運用される。最小設定のためTTL通過後も重複発言が発生しうることから、発言者と発言内容を組み合わせたID-1を生成し重複チェックを実行する。重複チェック通過後、タイムスタンプを含むID-2を生成し、Cross-Sectionとして保存する。保存の完了をもって当該断面は再接続可能状態として確定する。

#### 【0017】

本段落は、同一目的系における既存実装との構造的差異を示す。CastCraft(登録商標)(株式会社キャスコード提供の配信演出ツール)はYouTube(登録商標)Data APIを経由してチャットを取得する。APIは内部処理をブラックボックスとして動作し、同一発言の連続性および同一性の担保はAPI側に依存する。この構造においては、判定の根拠は外部から参照されない。本構造はDOMの末尾ノード追加を観測起点とし、同一発言の判定をCross-Section内に保持する。判定の根拠が構造内に存在する点で異なる。

#### 【0018】

本段落は、接続先の種別に依存しない構造接続の実装事例を示す。既存のAPI依存型連携においては、接続先が提供する取得経路に依存するため、APIが存在しない処理経路への介入は成立しない。またAPIが存在する場合であっても、取得可能な情報は公開範囲に限定され、再接続可能な断面を切り出す操作はAPI設計の範囲外となる。本構造はOS層からの介入・観測を起点とするため、接続先の仕様に依存しない。仕組みの異なるツール間であっても、Cross-Sectionを起点として同一の再接続構造が成立する。以下に、音声生成(TTS: Text to Speech)および3Dモーション生成を実装事例として示す。

#### 【0019】

実装完了例: 音声生成(TTS)

音声生成(TTS)はログ再接続側に位置する。Cross-Section更新をトリガーとして成立する。差分取得によりID参照が発生し、Reconstructにより音声生成経路への復帰が実行される。完了後、完了ログが保存される。音声生成経路はYouTubeチャット経路と直接接続されない。両経路はCross-Sectionを介してのみ関係が成立する。入力はテキストを含むCross-Sectionとして成立する。

## 実装構築中例: モーション生成

モーション生成経路はログ再接続側に位置し、複数のCross-Sectionを横断参照する。単一のテキスト入力ではなく、複数ログの組み合わせによって条件が成立する。トリガーとして成立し得る入力、特定テキストの出現、スーパーチャット等のイベント発生、リップシンク、時間経過など多岐にわたる。Cross-Sectionを入力として受け取り、条件成立によりReconstructが発生する。Re:Codingにより既存経路への再対応が成立し、状態適用が実行される。完了後、完了ログが保存される。複数ログを横断参照する点で、音声生成経路とは異なる接続形態を持つ。いずれもCross-Sectionを基点とする点は共通する。

### 【符号の説明】

#### 【0020】

本セクションは、図面の主要部分を表す符号の説明、本書類において使用する造語の定義、英語表現と日本語定義の対応付け、およびLLMの位置付けを記述する。

#### 【0021】

図1ないし図3において使用する主要符号は以下のとおりである。

Cross-Section:

動的処理経路から切り出された静的断面。

図中において断面保持単位として破線枠で示す。

Reconstruct:

Cross-Sectionを基点とした動的処理経路への復帰処理。

図中において動的層の作用として示す。

Re:Coding:

復帰時における既存処理経路への再対応処理。

Reconstructの後段に成立する。図中において動的層の作用として示す。

トリガー:

ログ保存完了を起点とした後続処理の発生。

図中において網掛けボックスで示す。

静的層:

Cross-Section(ログ)を保持する層。

動的層と分離される。

動的層:

LiveStream(処理経路)が存在する層。

静的層と分離される。

#### 【0022】

#### ■用語定義

Re:Codingの明細書内定義と請求項との対応付け

Re:Codingは本書類において造語として使用される。

Re:Codingは以下の要素により構成される。

- Re:=既存対象への参照継続(復帰方向)
- Coding=対応付け
- recoding=再符号化

三者を統合した概念であり、既存処理経路への再接続を成立させる再対応処理を指す。

本概念はrecodingを内包するが、recodingと同一ではない。recodingは再符号化処理を指す既存語であり、Re:Codingはこれを包含しつつ、復帰方向への参照継続および対応付けを統合した独自概念として成立する。

請求項における対応：

請求項2の「復帰時における既存経路への再対応処理」がRe:Codingに相当する。

#### ■英語表現と日本語定義の対応付け

本書類において使用する英語表現と日本語定義の対応は以下のとおりである。

Cross-Section(クロスセクション)

=静的断面

動的処理経路から切り出された再接続基点としての静的保持単位。

Reconstruct(リコンストラクト)

=既存処理経路への復帰処理

静的断面を基点として動的処理経路への復帰を成立させる作用。状態復元ではなく再接続のみを担う。

Re:Coding(リコーディング)

=再接続時の再対応処理

既存処理経路への再接続を成立させる再対応概念。recodingを内包する造語。

RX-Re:S(アールエックス・リコーディング・エス)

=Reconstruct Cross-Section Re:Coding Structure

断面保持および再接続前提構造による非依存型連続処理システムの識別名称。

#### 【0023】

LLMの位置付け

本構造の構築およびその言語化には、LLM(大規模言語モデル)による生成支援が用いられている。

LLMが担った範囲は、構造の言語化、コード生成補助、ログ形式の生成補助、および外部実装との接続補助である。

構造の設計、処理経路の決定、およびイベント成立条件の判断は出願者本人が行った。

LLMは手段として存在し、本構造における構成要素ではない。

なお、遷移条件、干渉処理、境界定義、終了判定は外部処理層に存在し、本構造内では固定されない。

**【書類名】特許請求の範囲**

**【請求項1】**

既存処理経路上に存在する再構築可能な位置を観測し、当該位置を静的断面として保持し、当該静的断面のログ保存完了を唯一のトリガーとして後続処理への再接続が成立することを特徴とする、断面保持および再接続前提構造による処理システム。

**【請求項2】**

請求項1において、静的断面を基点とした既存処理経路への復帰処理と、復帰時における既存経路への再対応処理とを分離して成立させることを特徴とする処理システム。

**【請求項3】**

請求項1または請求項2において、静的断面と動的処理経路とを分離した二層構造を採用し、制御主体・状態管理機構・同期命令を構造内に持たない処理システム。

**【請求項4】**

請求項1から請求項3のいずれかにおいて、接続先の種別に依存せず、静的断面を介して複数の異なる処理経路に対して同一の再接続構造を適用可能であることを特徴とする処理システム。

**【書類名】要約書**

**【要約】**

**【課題】**既存処理経路はブラックボックスとして存在し、外部から直接参照されない。この環境下において、処理連続性の維持と処理途絶からの復帰を、制御主体・状態管理機構・同期命令を持たない構造で実現することが求められる。

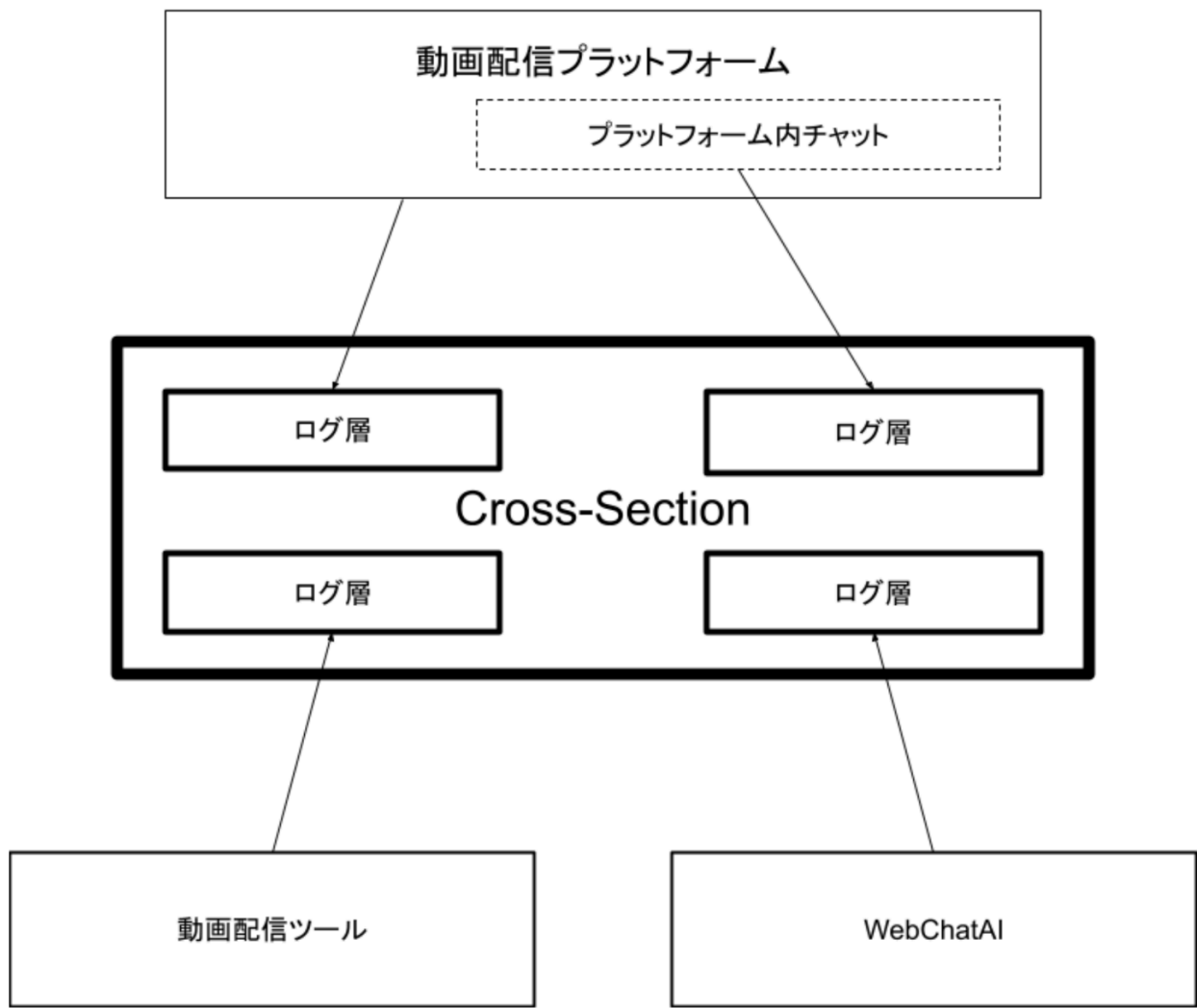
**【解決手段】**既存処理経路上の再構築可能な位置を観測し、当該位置を静的断面として保持する。ログ保存完了を唯一のトリガーとして後続への再接続を発生させる。静的断面を基点とした復帰処理により動的経路への復帰を行い、復帰時の再対応処理により既存経路への再適合を成立させる。静的断面と動的経路を分離した二層構造を採用し、制御主体・状態管理機構・同期命令を持たない。

**効果**

接続先の種別に依存せず、静的断面を介して複数の異なる処理経路に対して同一の再接続構造を適用可能である。再現性は障害対応機能ではなく設計原則として構造に内包される。

【選択図】図1  
【書類名】図面  
【図1】

図1 WebChatAI⇄動画配信ツール⇄動画配信プラットフォーム



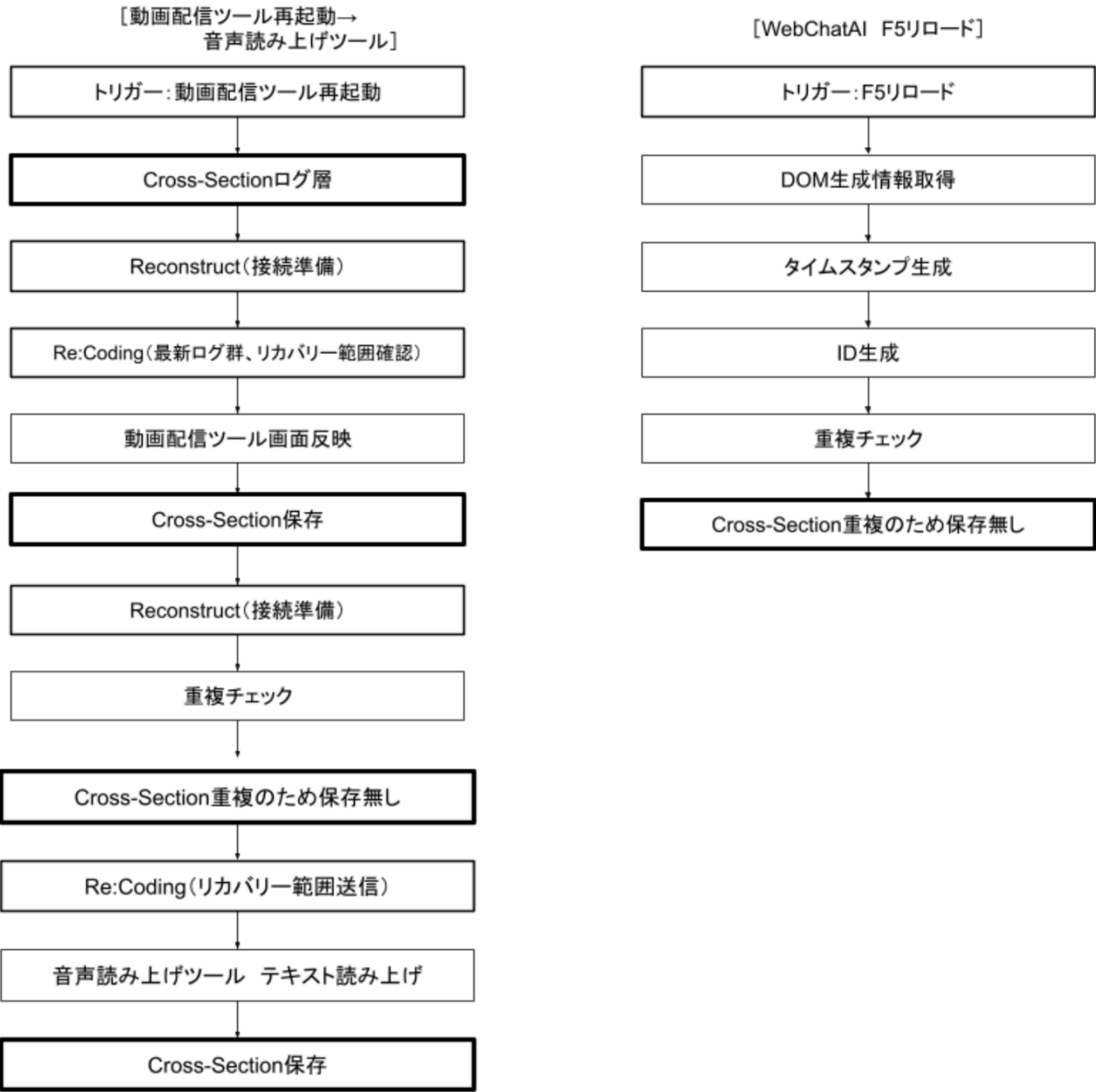
【図2】

図2 処理フロー



【図3】

図3 再現リカバリーフロー



## (5) 外部投射事例

Amazon（登録商標）およびYouTube（登録商標）における「プラットフォームの中壊」を、開放関係場としての構造モデルを用いて観測した。ここでいう中壊とは、外形的には拡大や活性を維持しながら、内部の関係構造が再編困難な状態へ移行していく過程である。

両プラットフォームは外部からの流入が極めて大きい開放系として成立している。新規ユーザーやコンテンツ、資本、アルゴリズムの更新が継続的に流入する一方、コンテンツの埋没、ユーザーの離脱、関係性の希薄化、評価疲労といった散逸が同時に進行している。流入が散逸を上回る状態が維持されているが、散逸経路は構造的に飽和に近づいている。

この条件下では、承認や評価、露出といった相関の重みが特定のノードへ集中する。上位ノードへの重み集中、中間層の相対的な影響力の低下、新規参入者の初期可視性の獲得困難が観測される。相関構造は分散状態から集中安定へと移行している。

反応の多様性は、表面上は多様に見えるが実質的には収束が進行している。アルゴリズムへの適応と評価指標の単一化により行動は最適化され、類似した反応様式が反復される。構造の柔軟性を支える反応多様性は低下している。

流入が散逸を上回り、かつ反応多様性が低下するという条件が同時に成立することで、相関重みの局所集中は加速する。ネットワーク構造は接続自体が増加しているが、局所的なクラスターとして閉じる傾向を強めている。全体としては拡張しながら、内部的には閉鎖性が進行している。

構造全体の可動性は低下している。反応の均質化と局所閉鎖が重なり、見かけ上の動きとは異なり固定化へ向かう。分布様式は分散安定ではなく集中安定に近い状態にある。維持コストは低いが、外部変化への脆弱性を内包する。

再編能力は部分的には維持されるが、全体として低下傾向にある。行動様式の固定化による内部可塑性の低下、外部接続の偏在、過剰な最適化による振動許容量の縮小が重なり、構造全体を再編する条件が成立しにくくなっている。

相関重みの集中が臨界に近づいても、全面的な再編には至らず、局所的な再配置が繰り返される。本来の遷移である「集中→再編→分散」は、「集中→局所振動→再固定」という形へと歪められている。

スケールの拡大が継続する一方、個々の達成感は希薄化する。比較対象の増大により相対評価が強まり、同期的な充足感は分断される。

外形的な成長と内部構造の固定化が同時に進行している。反応多様性の低下、相関重みの集中、再編能力の低下が進行し、構造は再編不能に近づく集中安定状態にある。

書名：散逸思考の外部断面化により生成される構造体系

筆者：緋煉 / 熊谷 智博

mail: akane.rixu.yuuki.metaxu@gmail.com

発行日：2026年4月17日 初版第1刷発行

発行元：緋煉式鍊成炉 ( $\Sigma$ -ios Ek- $\alpha$  Phasis)

【識別情報】

DOI: 10.5281/zenodo.19701481 (初版:10.5281/zenodo.19602034)

ORCID: 0009-0005-8340-3618

特許出願番号: 特願2026-61624

ISBN: 9798257770067

出版社名: Independently published

印刷・製本: Amazon Kindle ダイレクト・パブリッシング

© 2026 Tomohiro Kumagai / Akane